第２回　県立高校教育振興検討会議　議事概要

１　日　時　　令和５年８月 31 日（木）　10:00～12:10

２　場　所　　富山県民会館 302 号室

３　委員出席者　荒井　公浩　池永　美子　上田　良美　亀谷　卓朗
近藤　智久　品川　祐一郎　鈴木　真由美　田辺　惠子
鳥海　清司　中村　総一郎　松山　朋朗　水口　勝史
水口　芳美
アドバイザー　青木　栄一　南部　初世

４　会議の要旨

司会が開会を宣した。

議事事項

○　県立高校の再編に関する学校規模や基準などの基本的な方針について

○　県立高校の学科やコースの見直しについて

事務局から資料に基づき、本会議における検討事項の確認と検討に当たって参考とする事柄などについて説明した。

（会長）

それでは、最初の議題である県立高校の再編に関する学校規模や基準について、皆様方からご意見を伺いたいと思います。なお、この場で何か結論を出すということではなく、本日は幅広い観点から、様々なご意見を伺いたいと思っていますので、よろしくお願いします。

（委員）

年々、生徒数が減ってきており、学校を経営している立場からは、中学校でも１学年当たり最低４学級が必要だと感じています。本校も生徒が本当に少なくなり、来年度はすべての学年が３学級になってしまう見込みです。

学校を経営する立場で一番困るのは、資料８ページにもありましたが、学級数が減ると教員数が減ることです。学級数に応じて教員の定数配置がなされるので、小さくなればなるほどすべての教科への教員配置が難しくなるなど、質の高い教育を実施することが少しずつ困難になっています。

若手の教員も増えているので、教員がお互いに学び合うといったことについても、一定数の教員数は必要と考えています。ですから、県立高校も１学年当たりの学級数については、５、６学級は必要ではないかと個人的には考えています。

（委員）
まず、再編に関する学校規模や基準などの基本的な方針については、大前提として、前回の再編時に定めた基準を考えていかなければいけないと思っています。前回の再編時と比べ、今回は学校数や生徒数が一段と減少していく中での基準の設定となるので、再度考え直さなければならない部分が出てくると思いますが、これまでの取組みや経緯というものは尊重し、それを見ながら進めていくことが必要なのではないかと思っています。
その上で、５月に実施された県立学校のあり方に関するアンケート調査の結果や全国の再編の状況等も踏まえながら、生徒の学習環境の維持や部活動の活気という観点から考えると、本県の場合、学校規模に関する基準については、基本的には１学年４、５学級規模が望ましいのではないかと考えています。
私の学校も１学年４学級という状況なのですが、学習環境や部活動の面において、４学級がギリギリかなという気がしていますので、基本的には１学年５学級規模が望ましいのではないかと思っています。ただ、学校の地理的な状況や学科の特性なども考慮し、一概にすべての学校を同じ規模とするのは難しいところもあると思いますので、特別な対応も必要になってくると思っています。

（委員）
現在、当市でも規模が小さくなっている小学校がありますが、小学生が中学校に上がるときに、大規模の小学校から来た子どもたちに少し腰が引けてしまうというか、物怖じしてしまうような状況があります。少し悩ましいことだと思っていたのですが、中学校の校長先生から、「小学校とリモートで繋ぎ、一緒に中学校に上がる子どもたちと意見交換しながら慣れさせていくといった取組みを行っていこうか」という話が出ています。
小学生、中学生、高校生のいずれの校種であっても、小規模だとどうしても経験が少なくなってしまうということがあるのではないかと思っています。
後々、小規模になってしまう高校がどうしても出てくると思いますが、長崎県にキャンパス校があるということが資料にあったように、小規模の学校が大きな学校と繋がっていくという方法もあるのではないかと思っています。

（委員）
当市でも現在、学校の統廃合を計画的に進めているところです。基本的な考え方は中教審の作業部会の考え方などを参考にしながら、一定程度の学級規模を保ち、また、小中の連携を強めるような形で義務教育９年間の子どもたちの学びを充実させようというコンセプトで進めています。
それに伴い、小学校と中学校が割と近い、あるいは併設したような形といったように校舎整備などを工夫しているところですが、そのような統廃合を進めていく中で思っているのが、義務教育でもそれぞれの学校、校区ごとに特色ある活動を備えているということです。
高等学校であれば、学科がバラエティに富んでいるので、特色ある活動を実現する形で、もう少しダイナミックに教育課程の編成ができるのではないかと思います。
義務教育では、学習指導要領をたたき台としながら、その定める範囲内で弾力的な運用

を図っています。例えば、英語教育に少し重点を置いたような小中連携教育や、ふるさと教育ということで、地域に根差した活動をベースにしながら総合的な学習の時間に力点を置いている学校といったように、工夫をしているところなので、規模、基準ということも大切なことかもしれませんが、それを検討していく上で、高校であれば、学科あるいはコースの見直しといったことも合わせながら検討を進めていく必要があると思っています。

そこで、送り出し側としては、県立高校それぞれで思い切った教育課程の編成も含めて多様な学びの確保といったような努力がまずは必要なのではないかと感じています。

資料には他県の例として、定員割れをしたら再編対象となるといったような基準を設けていることがありますが、果たして最大限高校側として努力した上でのことなのか。富山県の場合、ウェルビーイングを掲げ、特色ある高校づくりということで報告書がまとめられましたが、学ぶ側にとってのウェルビーイングを考えたときに、現行の教育課程が果たしてそれに合致したものになっているのかといった視点で、しっかりと検討し、変革していくべきは変革していくべきだと思います。その結果や成果を踏まえながら、議論をさらに深めていく必要があると考えています。

資料には、令和 14 年や 19 年というレンジが目安として示されていましたが、地域が求めている学び、あるいは今の子どもに適している、子どもたちが求めている学びといったことに取り組んだ上で、子どもたちのニーズに応えられない、学級数が保てないということであれば、その方向を考えるといったように、少し考慮していくべきかと思います。そういった意味では、教育課程のパイロット校のような取組みも一つ考えられるのではないかなと思います。

また、先ほど学校規模と教員配置数の関係も意見に出ていましたが、例えば合科的な高校を編成していくことで、いろいろな学科の先生方が一つの学校に集まることになります。そうなると、単独学科の高校より、多様な先生方がそこにいてくださるということになり、先ほど申し上げたような多様な学びや子どもたちの多様なニーズに応えていける環境が提供できるのではないかなと思います。

繰り返しになりますが、高校教育なので、いろいろな課題があるとは思いますが、大胆な取組みが可能なのではないか、それで乗り切っていけないものかと思っているところです。

（委員）

私は今の４学級が再編の対象になっている基準を引き下げるべきという意見をもっています。前回の会議でも申し上げましたが、通学の困難さという地域の特性があるので、そこには極力配慮すべきと思っています。

学級規模が異なる複数の学校を経営していますが、大小それぞれのメリット、デメリットがあると考えています。そのメリット、デメリットは、資料の７ページにもありましたが、まさにその通りで、小規模校は一人一人の生徒に目が届きやすいといったメリットがあります。大規模校だと、できることは増え、多様化が見込めるといったことがあります。学校としてのまとまりでいうと、小規模校の方がまとまりやすく、大規模だとかなり労力を要するといったこともあるので、一律に４学級以下だから再編の対象とするのは、今後見直した方がいいと思っています。

（委員）
学級数のことについて、それぞれの委員の方から４学級や４～５学級、必ずしも４学級に拘泥する必要もないという話が出ましたが、保護者としては学級、学校運営のことがわかりませんので、４学級が最低よいとか、３学級が最低よいとはなかなか申し上げられません。４学級くらいが一つの目安なのだろうと思いますが、地域の実情や校風によって、３学級であったり、２学級であったりする要請も許容されるのかなと聞いていました。
ただ大事だと思うことは、効率的な先生方の配置や科目の運営、学校運営ということはあるものの、「子どもファースト」の視点で、生徒たちが２学級であっても３学級であっても「生き生きした生活を送れる学校」、「ウェルビーイングな人生に向けて自分の指針を見つけ出せるような学校」といった視点、どんな生徒を育てたいかという視点で、学級数や再編の議論をすることが大切ではないかと思います。決して再編を後ろ向きにするのではなく、富山県の高校はこのような教育を目指し、このようなユニークな人材を育てていくことになったので、それぞれ特色のある学校に自分の子どもを通わせたいと、子どもも保護者も思ってもらえるような姿になればいいのではと感じています。

（委員）
資料の最初のページにもあるように、生徒が 30%減るということに改めて危機感を覚えています。また、例えば、南砺や砺波で金沢方面に行くというようなこともあります。社会減のようなこともあるのかなと思うと、なおさら危機感を覚えています。
また学級数については、私は３学級なのか４学級なのかと言われても、なかなかピンとこないというのが実情で、全国的なことや県内の実情を見ながら、４学級くらいが妥当なのかと根拠なく思っている状況です。
前回再編時の基準に「再編検討時の学級規模」とありますが、その再編検討時というのはいつなのかというところが明らかになっていないので、その辺りがよくわかっていません。実際再編が決定した時に、例えば中学校２年生の子に伝えなければいけないとか、いつ伝えてそれを決めるには、どのくらい検討期間が必要なのかという時間的な基準というものも決めた方がいいのではないかと思いました。

（会長）
今ほどあった資料２の３ページに前回の基準が載っていますが、もし事務局の方からございましたらお願いします。

（事務局）
前回の再編基準ということですが、学校規模やどの学校を対象にしていくかということを決める時点を検討時というとらえ方としていました。
この検討会議で検討いただくのは、こうしたところも含め、方針や基本的な考え方を出していかなければいけないと思っていますので、どのようなタイムテーブルでというところも含め、この検討会議で検討していく必要があると思っています。

（会長）
私の認識は、資料２の３ページのように前回もこのような形で議論が進められて、平成28年４月の報告書がまとめられ、それに基づき、１学年４から８学級という基準が打ち出され、令和２年の再編が行われたと思っていたので、その基準がある前提で、今回もこの振興検討会議で皆様方のご意見をいただきながら、最終的には再編基準に該当するようなものを打ち出せばいいのではと考えています。

（委員）
私の言い方がまずかったのかもしれませんが、再編するとなった時に何年後を目指してやるのかということ、余りにも長いとあと追いあと追いになってしまいますし、どのくらいかかるのかなと思いながら、伺った次第です。

（会長）
それについてはこれから検討ということでよろしいですか。

（事務局）
はい。

（委員）
委員の皆さんのご意見や資料等からも、高校に通う生徒たちにどういったことが最も大事なのかというところから捉えていく必要があると思います。そこでの学習が十分に幅広くできるということが大事なところになるのではないかと思います。そういった観点からは、生徒の科目選択が十分にできるということが一つ必要なことではないかと思います。
もう一つは、１人の先生にいつも習っているという状況ではなく、同じようなことだとしても多様な教員から学んでいくということが必要で、その辺りのことが最も重要ではないかと考えます。前回もおそらくその辺を考慮した基準となっていると思うのですが、そういった意味では、前回の基準と同じような基準を保っていくのもよいのではないかと思います。
学級規模については現在、1学級40人として計算されています。いつ法律が変わるかわからない中であり、あまり長いスパンを置いてしまうと状況が変わってくるとは思いますが、現状は変わることはないと思うので、前回と同じような基準でやっていけばよいのではないかと思います。
もう一つの視点として、生徒たちの生活という部分があります。現在、登校に時間がかかるというような部分を考慮し、小規模でもやっているという部分があるので、その辺は残しておく必要があるのではとも思います。

（委員）
富山県では定員を考えるときに、県立高校と私立高校の割合を定めており、それで定員が決まっていると伺っていますので、他県では定員割れをしたらすぐ見直しというような基準を設けているところもありますが、なかなかそういった一律の基準で線を引くという

ことは難しいのではないかと思っています。
　また、今まで様々な委員の方が仰いましたが、通学距離や多様な教育といったことを考えると、一つの基準で全部を決めてしまうということではなく、いろいろな観点をもちながら、この高校は再編の対象にするといったことを考えていかなければならないのだろうと思っています。
　さらに、アンケート等の結果がありましたが、生徒ファーストが大切になるので、生徒の希望や保護者の考えも含めて対応していくことが必要になると思います。
　また、再編について方針が決まった時には、客観的なデータを出し、合理的な説明をした上で、保護者の方々や生徒の皆さんにも理解をしていただき、対応を進めていくということが重要だと思っています。

（委員）
　私の場合は、経験した親の立場からでしかわからないのですが、中学校２年、３年で、自分が将来何をしたいのかということをどれだけ決められるのか少し不安に思っています。
　そして、高校がどういった理由で選ばれるのかというと、やはり成績が基準になってくると思っています。経験上は、ほとんどが普通科を希望するような状況であったと思っていますが、工業科や工芸科などいろいろな学科のある学校もたくさんあります。
　高校へ進学した際には次の進学のことなどいろいろな考えに基づき、方向性が変わってくると思います。そのような時に、自分が選んだ学校で、将来の方向性にあった大学に行く選択ができるのかどうかということも、とても大切になるのではないかと思っています。
　スポーツに特化した学科があるところでは、サッカーや野球をしたいという方々は、将来的にもそれを望んでずっと特化して頑張っていると聞いています。親の立場では不安はあるのですが、学校の先生方はそういった指導をどのようにしてくださるのか、文系理系のどちらを選べばいいのか迷うという声もあったので、そういう指導を進学した際にしていただけるといいと思っています。

（委員）
　子どもの数の急激な減少が迫ってきているというこの深刻な事態について非常に真摯に受け止めています。これは教育だけの世界ではなく、私たちの会社にとっても社員数が減っていくわけですから、教育だけの問題ではなく社会的な問題なのだということで、私も共有して考えを述べていかなければいけないと思っています。
　会社では、方針とそれを実現するための戦略を作っていくわけですが、こうした少子化時代を迎えるにあたり大事なことは、富山県としてどういう高校教育を目指すのかという方針と戦略を作る、そういう考え方が大事なのではと思います。
　どういう方針かというと、いわゆる富山県らしい、伝統ある教育県にふさわしいもの。その教育県にふさわしいというのは何をもって教育県かというと、富山の場合は大学進学率の高さと言えるでしょうか。この高さを維持する、あるいはもっと強化しようとするという考え方が１点。
　２点目は、社会、職業、産業が多様化しているのは事実だと思いますが、そういう多様化している分野の専門性を高めるという高校教育を目指す。

３点目は、生徒が主役であるので、今の高校生が本当に学びたくなるような学校教育を目指すといったように、生徒本位、生徒主体の高校教育を目指すということをはっきりしていかないと、これからいろいろな基準づくりをする際に問題が起こったり、結論が出ないとなったりしてしまうのではないかと思うので、そういった方針の部分をまず明確にしていく必要があると感じています。

そして２番目に高校教育の質のレベルを下げるわけにはいかないと思っています。そのためには、学校の規模は非常に重要だと思っています。学校の規模、生徒数あるいは学級数が大変重要であり、それが低下することは極力避けるべきだと思います。

しかし生徒数が減っていくわけですから、何かしらの影響が出るのは事実ですが、あまり複雑に考えるとよくないので、先ほど申し上げた方針をもとに生徒主体に考えていき、質の高い教育を目指すことを考える。従って、地域の問題や交通の便の問題は一旦置いておき、それはまた対策する手段が見える場合もあると思うので、教育の質を高めることをまずは考えるべきではないかと思います。

富山県の県立高校は大きく３つの特色というか部類に分けられると思います。普通科、あるいは探究科学科を含めたいわゆる進学校、職業系の専門性の高い学校、そして普通科と職業科をミックスしたような学校です。

近年統合した学校に普通科と職業科をミックスした特色が出てきていると思いますが、学校が大きくなって活気が出てきた学校もできているように感じています。この学校のような特色からも、学校の規模を小さくしないという発想になった方が目指す高校教育に近づけるのではないかと考えました。

（会長）

このタイミングで私も意見を表明させていただきます。私も経済界で商業を生業としておりますが、前回も申し上げた三方よしという言葉、つまり「売り手よし・買い手よし・世間よし」の３つのバランスを取り、より高いレベルに上げていくということが、より成熟した高度な事業運営であり社会構造でもあると思っています。今日は「売り手よし」という表現は不適切かもしれませんが、最初に学校の先生方に、また「買い手よし」として児童・生徒の保護者の皆さんに、「世間よし」として、市民や経済界、学術界の皆さんにそれぞれお話をいただきました。

そういう意味では、「三方よし」それぞれの立場の皆さんの意見のバランスをとらなければいけないし、より高いレベルでバランスが取れるということが、民度というか県の実勢というか、県民の教育の力なのではないかと思います。人口減少という抗えない事実がある中で、どう「三方よし」を高めていくかということが、目指すべき方針・ビジョンなのではないかと個人的な意見として表明させていただきます。

（委員）

教育関係者ではないので、今の教育現場ということはよくわかりませんが、南砺市では井波高校や福光高校がなくなり、子どもたちの選択肢が限られてきているように思います。高岡や富山だと選択肢もたくさんありますが、砺波地区でいうと選べる高校が数少なくなっています。

これ以上高校が減るとどうなるのか心配していますし、公共交通機関を使わないとなかなか高校へも通学できない状況もあるので、４～５学級が望ましいというのもよくわかるのですが、いろいろな地域の事情などもお考えいただきたいと思っています。

（アドバイザー）

専門が教育行政学ですので、その観点からのコメントになろうかと思います。

まず、この会議にはある種の外枠がはめられていると思います。例えば、現行のルールとしては、公立と私立の比率というものが外枠ではめられています。その問題をここでは扱わないのだとすると、必要があればこの会議では扱わないけれど議題にしてくださいということをこの会議から言わなければいけないと思います。

また、他県からの流入や他県流出という問題も、今のところはこの会議の射程外なのだと思いますが、そういう議論をするのかどうかということも議論された方がよいと思います。

いずれにしてもこれは富山県としてのご判断になります。例えば、高校教育と義務教育を比較すると、文部科学省からの規制について、高校教育は弱いです。制度的には県の判断というのがかなりできる領域ですので、例えば、教職員の配置とか定数の基準を富山県独自でどれくらいにするかを決めることもできます。それをどうするか考えることは大事なことだと思います。

例えば、1 学級 40 人という前提で議論されていると思いますが、国レベルで見ても、小学校はもうすぐ 35 人学級に、いずれ中学校を 35 人にするかどうかという議論が始まります。では高校はどうするかというと、申し上げたとおり基本は県の判断となります。そうした県としての判断で変えられる要素というのが少しはあるということを申し上げておきます。

もう一つは、学校の働き方改革ということについて、国からかなり強烈なメッセージが出始めています。資料にある平成 20 年度の義務教育における国の統廃合のガイドライン、考え方のような時代ではもはやないのです。そこには、部活動と学校行事についてかなり重要な考慮すべき要素として出ていましたが、学校の働き方改革からすると、部活動は地域移行し、基本は学校でやらない方向に進みますし、学校行事もどんどん精選していきます。ということは、統廃合など高校の再編の議論に際して考慮事項にしないでいいということになってしまうわけです。

富山県のご判断なので、どのくらいそれを考慮するのか。富山県の判断として、地域移行せずに高校で部活動をやるということであれば、それはそれでいいと思いますが、地域移行するということであれば、再編の基準の議論から外さないといけないことだと思います。

また、将来的なカリキュラムなどについてのご発言がありましたが、非常に重要な観点だと思っています。フルセット型の高校モデルをどのくらい維持するつもりがあるのかというのは、明確な論点にすべきだと思います。単独の学校でフルセットの教育サービスを提供するというモデルで、今の議論が進んでいると思いますが、それも無理な時代がいずれ来ます。ではどうするか。例えば、オンラインの教育をどの程度組み込むのかといったことや、学校間連携でどのくらい提供する科目を維持するのかということがあると思いま

す。その時に高校教育のゴールというかミッションをどう設定するかということが大事で、アメリカなどではカレッジもしくはキャリアレディという考え方で、高校を卒業した場合に、就職を選ぶにしろ、大学進学を選ぶにしろ、十分にそこでやっていける力を身に付けるということが大事という考え方をしています。富山の高校教育もどういう進路を選ぶにしても、しっかり社会や大学に送り出せる教育を提供できるのかどうかということを大事にしていけばよいと思います。

最後に、再編の話がいずれ出てくると思うので、その時には固有名詞の話になると思います。これだけ高校が少なくなっている状態の県なので、一律の基準にして、この基準に当てはまったから再編対象ですとするのは、議論の進め方としてよくないだろうと思います。

補足しますと、コストについて議論した方がいいのではないかと思います。今の高校教育あるいは再編後の高校教育のコスト、人件費も県の財源でもっているので、維持管理費を含めて見える化は大事なことかと思いました。

（アドバイザー）

現行の再編の進め方や再編基準については、2016 年の報告書に基づいたもので、１学年４～８学級とすることを目指すという形で書かれていますが、これは適正規模の話だろうと思います。この適正規模自体は、全国の動向から見てもおそらく妥当だと私も思います。

この 16 年の報告書では続けて再編基準という項目があり、規模に関する基準として、学校規模が１学年４学級未満または 160 人未満の規模の学校については、再編統合の検討の対象とすると定められ、極めて規模の小さい学校から検討するとなっています。ただし、全県的な視野から特色ある教育活動の展開が期待できるなど、特別な事情がある場合は対象としないということが書かれています。

私自身は、この基準をもう少し弾力的に運用することはできないかということを考えています。適正規模を下回る場合、即座に再編統合の検討対象とするのではなく、まずはその学校の活性化を図ることを考えてはどうかと思います。今年の５月に報告書が出され６つの方向性と具体策が挙がっていました。それを組み合わせた改革案を作成するということを考えてはどうかと思いました。

学校の強み、これが魅力になるわけですが、それがそれぞれの学校にとって何なのか。言い換えれば、その学校はどのようなリソースを活用することができるのかということやその学校の生徒や保護者、地域は何を望んでいるのかということを把握し、地域、大学、企業との連携や高校同士、中高間といった学校間連携を推進し、小規模校を残すという選択をすることもあり得るのではないかと思います。学校の存続は地域の存続に密接に関わってくる場合もあるので、先ほどもあった遠隔教育等を活用するなどいくつか組み合わせることで考えられると思います。小規模の残し方自体は、いわゆる分校化をするということもあり得るかもしれない。

中高連携ということで特色を出していく、選ばれる学校を目指していくということであれば、中高一貫教育校を選択するという学校もあり得るかもしれません。これは１例ですが、いろいろ考えられると思います。それで、最終的に統廃合に至るという学校が出るかもしれません。だから、一律にこの基準を満たさない学校はこうするというよりも、１校

１校違った選択ということがあり得るのでないかと思います。
事務局からの説明もありましたが、全国の動向としては適正規模を満たさない場合、速やかに再編する、募集停止をするという県もあります。そういう県がある一方、弾力的運用を行う県も存在しています。
その時の要素としては、地理的状況や地元の中学校からどれだけ進学しているか、こうした状況が何年続いているか、今後の見通しといったことが挙げられます。
また珍しいと感じた例としては、一つの学校で考えるのではなく近接する２校で判断しているような県もあります。
学級減についても慎重な対応が求められるわけですが、学級減のための条件を設定しているような県もあるので、こうしたことから選択肢はいくつかあるのではないかと考えています。

（会長）
ありがとうございます。多様な視点からの検討が必要であると思いながら伺いました。
次に、学科・コースの見直しや学校の配置を含めた普通科職業科比率の検討という２つ目のテーマについて、委員の皆様のご意見を伺いたいと思います。
視察報告を大変興味深く拝読していました。例えば、流通まで含めた農業教育の魅力向上であるとか、工業教育においては、就職先企業と深く連携した取組み、また進学を前提とした工業教育、より就職先の業態のニーズに合った教育の導入といった柔軟な職業教育の見直しの事例だったと思います。
それでは、学科・コースの見直しを含めてご発言いただいた委員の方から、ご意見をお願いします。

（委員）
職業系学科のことに触れさせていただきます。地元に商業高校や工業系の学校があります。以前から学科名がしばらく変わっていないと個人的に感じています。
子どもたちのニーズを考えた場合、例えばＩＴにしても以前から随分と変わってきています。工業科にしても、使用する機器などいろいろなものの更新はしていると思いますが、ねらいとする専門的な知識や技能、社会から求められている能力や技能といった力も変化してきているのではないかと思っています。
例えば機械科でも、かつては機械と電子機械といったように２つあったのが、今は学問の領域一つを考えても、境目がどんどんなくなってきています。そうした中で、今の形に合った学科、何学級設けるかは別ですが、そうした学科の組み替えというか作り直しといったことがあってもいいのではと感じています。
先ほど先進事例の視察報告がありましたが、こうしたものが大いに参考になってくると思います。例えば高岡には、いろいろなものづくりの伝統産業や地場産業があります。そういった地域性が各地区にあると思いますが、それを捉えながら各地区にある職業系専門学科の中で実現していくことは、富山らしさや子どもたちの将来目指す形ということに適合するのではないかと思います。

（委員）

私も学科の話は非常により具体的で、いいお話を聞けたと思っています。

資料３にもあるように、今後の学科やコースの見直しは、先ほど申し上げたように生徒主体に見ていく必要があると思います。従って、倍率という数字を何らか大きく反映させていく基準というのが一つあるのではないかなと思います。

人気のない学科があり、その学科をずっと維持するというのは少し強引だと思うし、何で人気がないのか、何でここは偏って人気があるのかということは、何らかの理由があるわけです。その理由を１年、１年紐解き、柔軟な学校、学科の編成に役立てていくようなきめ細かい努力が大切ではないかと思います。それがあって、初めて生徒はこの学校に行きたい、そしてここでこういう勉強をしたいという思いになるのではないかと思います。

資料の中で、職業科の生徒も最近はどんどん大学に進学をしており、職業科が必ずしも卒業後に就職するわけではないというデータも出ています。今、教育界に求められているのは柔軟性だと思うのですが、そうした柔軟な学校教育をしていくためには、普通科と職業科のミックスというか、共存を図るということは大切なのではないかと思います。

ある学年までは一緒に勉強していたけれど、ある学年からは専門性を高めていく生徒とジェネラルな分野でいく生徒という選択ができることは、生徒にとってはありがたいと思いますし、学校を運営していく場合も、そういう柔軟性があった方が運営しやすいのではないのかと考えます。

今の私の話と逆行するかもしれませんが、富山県にとっては、農業、水産というのはとても大切ではないかと思っています。富山県の県政や立ち位置を考えると農業や水産系なくして成り立たないと思います。ですから水産科をはじめとして、これだけ恵まれた自然があるという特徴を富山県としてはずっと維持していくことを考える必要があると思います。

そして、富山県のもう一つの特徴は、工業県ということです。こうした分野をもう少し全国からうらやましくなられるように、高校のあり方をこの機会に思い切ってデザインするべきだと思います。

私の一つの提案としては学科名、極端な話、学校名まで変えてはどうかということです。会社においても社名を変えることは間違いなくいいのです。変えた方がいろいろなものが新しく変わろうとしているのだというメッセージを全社員に伝えることができます。従って、そういうこともこの機会に思い切って考えてみたらどうかと思います。

ちなみに、今日の会議の前に、当社の就職課に相談をして、今どういう名前のところに生徒が来ているか、どういう学校にどういう学科があるのか調べてもらい、相談してきました。

例えば、農業科はアグリサイエンス科といったような名前にしたらどうか。実際そういう大学もあるようです。水産科も、非常に馴染みが深過ぎて人気がだんだんなくなってきているようなので、マリンリサーチ科。こういう名前だと非常に垢抜けた気持ちになり、ここに入ってくるとやる気が出てくると思います。そういうことが大事なのではないかと思います。

工業科では、機械系であれば、メカニカル学科とか、電気系であれば、エレクトロニクス学科とか。電子機械という、最近は電子と機械が共存する世界になっているのですが、

ロボティックスとか、メカトロニクスとか。そういう言葉も今の子どもたちにとっては自然に興味本位になれる名前だと思います。あとは、家庭科を生活デザイン科としたら、男性でも行きたくなるような名前になると思うのです。そして、看護学科はヘルスケア学科。こうするとより大きな幅広い勉強ができる。福祉系学科は、ウェルフェアとかウェルネスとかそういう言葉になるのですが、ここにウェルビーイングをもってきたらどうかとか。こういう名前をもってくると非常に富山県らしいと思います。

工夫しなければいけないのは土木科ではないかと思っています。土木科という名前だと女子が入りにくいのではないかと思います。それは名前が災いをしていると思うので、土木科をアーバンデザイン科とか、あるいはもう少し幅広い勉強ができるという意味で環境工学科とか。こうしただけで女子も入って勉強しようという気になるのではないかと思います。

それがだんだん県外流出の問題にも繋がっていき、富山県に残り、なおかつ富山の会社に就職をするという形で繋がっていくのではないかと、就職課の人たちと話をしてきたので参考にしていただければと思います。

（委員）

私は、子どもがどこの学校を選ぶか決める際、普通科が一番という安易な考えであったと思います。しかし、この間からいろいろと伝統産業等を見せていただき、高岡にいながら自分自身も知らなかったことがたくさんあることに気付きました。

親としては、進学するのか、就職するのかは大きな問題です。家業を継げというような地域性もあります。その中で、農業科の方や水産科の方は、いろいろなことが難しい状況にあると思っています。

誇りをもてるような学科であったり、誇りをもてるような学習があったりすることは、とても必要なことだと思います。まず、中学生の時に、そういったことを理解してもらえる教育をすべきですし、それを学ぶことによって、高校を選ぶ材料にもなります。高校へ入ってからも、理数系を選ぶのか、工業系を選ぶのか、文系を選ぶのかいろいろ自分の考えが出てくると思うのですが、高校２年、３年になった時に、また選べる機会があることもとても必要なことだと思っています。

本人たちが望む学びの場が一番大切です。先生方がいろいろアドバイスしてくださり、いろいろな状況を学ぶ機会がある中学の時代、高校１、２年の時代も必要なことだと思います。

（委員）

中学校では、これから進路選択の時期に入っていきます。本県では、夏休み中にオープンハイスクールという、子どもたちが自分の進学したい、興味がある高校で体験したり、見学したりできる制度があり、これがすごく進路選択に役立っています。

コロナ禍で参加できない時がありましたが、今年度は全面的な実施となり、子どもたちが行って肌で感じる、ホームページや資料などではわからない高校のもつ空気感、先輩や教員の方の学校風土のようなものを肌で感じてきて、夏休み明けには「この高校に行きたい」と言ってくる生徒が増えるのがこの時期です。

オープンハイスクールはいい制度ですが、行ける高校が一つか二つです。それ以外に、子どもたちが高校のことを知る方法は、ホームページなどになりますが、それぞれの高校の取組みをぜひアピールして、よい取組みをどんどんアピールしていただけたらありがたいと思っています。

私は以前、ある農業高校に近い中学校に勤めていました。ここでは中高連携ではありませんが、中学３年生を呼んでいただき、半日ほど高校の取組みを体験する機会がありました。実際にトラクタの運転や最近ではスマート農業でドローンを飛ばした水田管理、あるいは畜産の体験といった幅広い農業を体験します。それに参加した子どもたちは農業の素晴らしさを本当に体感していました。そういった中高連携の取組みも進めていただき、どんどん高校のよさを中学生にアピールしてもらい、進路選択の一つになったらよいと感じています。

また、工業科に関しては、電気科、機械科、電子機械科などそれぞれの科がありますが、科の違いがわからないまま、進路選択をする場合があります。その違いをどうやって子どもたちにわかるようにしていけばいいのかということも、中学校側での悩みの一つです。

現在の子どもたちを取り巻く環境であるＩＴやコンピューターを将来勉強していきたいと思っている子どもたちが多くなっています。どの中学校にもコンピューター部は必ずあり、そこに在籍している生徒は結構います。そこで、プログラミングなどをしている生徒が増えてきていると感じています。ＩＴを全面的にやるというような学科ができれば、工業科に進む生徒ももう少し増えてくるのかなと感じています。

（委員）

私は、普通科と職業系専門学科との比率、あるいは学科別の募集定員のあり方も含めて、生徒数の減少に応じてしっかりと検討していく必要があるだろうと思っています。

資料２ページに普通科の割合があり、今までだと 66％程度ということで学級編制が行われていましたが、普通科の割合が少なくなっている分、職業科の割合が大きくなっており、ここ数年の学科別募集定員の充足状況にも影響が出ているのではないかと思います。

工業科と農業科について、私も社会の変化に応じた魅力ある学科やコースの形態を考えていく必要があるのではないかと感じました。実際に私は、複数の職業科が併設されている学校にいました。私がいた学校だけでなく、職業系の学校は大変素晴らしい教育活動を実践しており、大変魅力あるものになっています。

ただ、もしもその魅力と現在の社会状況とがうまくマッチしていないところがあるならば、これから高校生となる中学生が魅力を感じるような形態を模索していくことが必要ではないかと感じています。その場合は当然、各学校の意見はしっかりと聞く必要はあると思っています。

もう一つ、資料３の７ページの「学科別志願状況と欠員状況」にある総合学科は、例年非常に安定した状況になっていると見てとれるので、この人気の要因を分析して、どのような特色が総合学科を選ぶ理由になっているのかを考えていくことも必要になるとも思いました。

（委員）

１回目の会議でも申し上げたように、私は小学校、中学校からのキャリア教育が重要であると思っています。小学校の頃からも、自分は将来どのような職業に就きたいか、そのためにはどのような学びをすればいいのかを考えてもらうことが大切であると思っています。

ただその反面、先ほどもありましたが、中学校の先生方が進路指導していく中で、例えば、「僕は工業系の学校に行って、地元での就職を考えている」と言う生徒に、「この学科とこの学科とこの学科があるけど、どうする？」と聞き、「僕はここに行きたい」と決めたとしても、まずそこに入れるのかといったことや駄目だったから違う学科になったといった、いろいろな問題があります。

視察報告の中に、入る時は大枠で入り、その後にコース選択ができるような高校がありましたが、これがよいと思いました。こういうことであれば、進路指導の面からも指導しやすいし、子どもたちの選択肢も広がり、こうしたものもあれば望ましいのではないかと思います。

いずれにしても、子どもたちの主体的な進路選択を支えるのは、小中学校におけるキャリア教育であると思うので、引き続き力を入れていきたいと思っています。

（委員）

職業系や工業系であれば、小学科がたくさんあるので、広く子どもたちの多様な学びに対応できていると思います。ただ現状に即しているかどうかという問題があると思います。

また、多様な学びがあればあるほど、学級数の維持などで相反することもあると思っています。

親の立場としては、将来何になりたいのかを中学校の時に聞いても、子どもはよくわからないということがほとんどではないかと思います。その時に、「とりあえず普通科に」というようなアドバイスをしてしまう親の気持ちもあると思います。

工業系も特色を付けるのであれば、必修化された「情報」が特色になるのではないかと思います。特に工業系とデータサイエンスといったものは非常に親和性も高いので、そういったところで特色化することがよいと思います。特に県立大学では、データサイエンスに力を入れているので、高大連携も図れて非常にいい特色が出ると思います。

また、学科ごとに特色ということであれば、地域という特色も一つあるのではないかと思います。小学校、中学校は市町と一緒になって地域学習ができますが、高校は市町以外から来ている子どもたちもいるので、なかなか地域学習ができていないと思います。

私は、高校とまちづくりの授業などで高校生にアドバイスをしていますが、子どもたちが地域に目を向け出すと、日頃うつむいてスマホばかり見ているのが、「そこにお店ができた」、「あそこが空き家になったね」というような会話をするようになってきます。

そういった意味で、小中高という場面で地域連携をし、一緒に協力していくことが大事だと思います。「総合的な探究の時間」は非常に使いやすい授業だと思っています。地域愛を育むことで、大学に行っても、また富山に帰ってくることが期待できると思います。

（会長）
地域教育について、私も全く同感、賛成です。応援をしたいところです。

（委員）
先ほどの委員が、富山県教育全体の方針、ビジョンがあって、それに合わせてサイズや学科編成も決めていくことが望ましいということを仰いましたが、なるほどそうだなと感じました。また、学科、コースの名称変更のアイディアもとてもよいと思いました。
それと、進学校と呼ばれるところであっても商業高校であっても工業高校であっても、それぞれの学校の特色の明確化という点が大事だと感じます。例えば富山商業なら、「経営が学べて、いろいろな起業家の先輩の話が聴けて社長になるのに近道」だとか、高岡商業なら、「経理・総務・財務の人材のプロで、地元の就職にバッチリ」という具合に、進学校でももう少し「育てたい人材像」が明確にあればよいと思います。普通科であっても商業高校であっても、スクール・ポリシーは学校運営協議会等で決められているのでしょうが、その内容をしっかり議論し、県全体の方針も踏まえながら、各学校の存在意義を際立たせていくことが大事になってくるのかと思います。規模や大学進学率の競争ではなく、理念やビジョンの競争で、「選ばれる高校」「魅力的な高校」が増えていくことを期待します。
ＧＩＧＡスクール構想が入ってきた時に経済産業省の浅野大介さんの話を聞いた際、これから求められる人財は、「知識のアウトプットの正確性に長けた人材」より、「今までのルールを書き直すような人財、社会課題の発見と解決に興味をもったチェンジメーカーのような人財」だというお話しが印象的でした。商業高校であっても普通科であっても、そういう「チェンジメーカーを育てていこう」という発想が大切な気がします。商業高校の例で言えば、経営改善のためにどの経費を削減するかを考えるのは旧来型の商業高校の教え方です。一方、どうやって商品サービスの付加価値を高めていくかを考えさせるのは、これからの商業高校の姿だと思うので、そういう大人側の発想の転換が必要だと思います。
最後に、10 歳の段階、14 歳の段階、あるいは、高校１年、２年の段階で、「自分にとって幸せな人生とは何か」や「自分の登りたい山（人生の目的）はどこなのか」を考える場面が授業の中で増えたらよいと思います。その中で、「将来の幸せな自分像」から逆算して、そのプロセスとして、自分に合った高校を選択していくということが望ましい姿だと感じます。
富山県は教育県と言われますが、社会に役立つ人間が多くて、幸せをたくさん感じられる人が多い県が、本当の教育県だと感じます。その意味で、学校でも、家庭でも「自分にとっての幸せは何なのか」、「自分は何になりたいのか」を大人が問いかける場面がもっと増えればいいのではないかと感じます。

（委員）
「令和の魅力と活力ある県立高校のあり方に関する報告書」でも、職業科、学科の見直しに関しては、生徒の希望や産業界のニーズとバランス等を考えるということが書かれています。これはまさしく社会の変化に対応して、いろいろ考えていかなければならないということだと思うので、ぜひこのような形で進められるとよいと思いました。
また、今回のいろいろお話が出てきた名称変更に関しては、大学もこれまでやってきて

おり、そういう意味では確かに名前を変えるとすごくイメージが膨らみ、生徒にとっては、入りやすい学科が増えてくると思います。ただ、やりすぎると何をしているのかわからないので、そこはぜひイメージがしっかりついてくるような名前を考えていただければと思います。

一括募集のお話がありました。私事ですが、大学に入るときに工学部の一括募集で入りました。いろいろな学科から決められなかったという事情もあり、一括募集の大学に入りました。そういうことを考えても、中学生の時に何学科かきっちり決めることは難しいということもあるので、例えば、一括募集や進んでから転学科できるといったことを柔軟にしていただき、高校に入って将来を決める時に柔軟に対応できるような体制ができると職業科、普通科どちらも幸せになるのではないかと感じています。

どうしても少子化のために学科を作っていけないということもあると思いますが、ＩＴやオンライン授業といったものも活用し、できることは全部使い、多様な教育を生徒にしていければいいのではないかと思いました。

最後に、県立大学がＤＸに力を入れているという話をいただきました。ぜひ、高大連携を進められればと思います。

（委員）

最初の議題に学校再編がありましたが、２つ目の議題では普通科とそれ以外の学校は分けられて再編されているということでした。今後はここもその枠を取り払った方がいいのではないかと思います。先ほどの委員からもあったように職業科と普通科が一つの学校になり、その中で共通の授業科目などもあるわけなので、授業をオープン化し、お互いに乗り入れながらやっていく。すると、その分特色も出てくるのではないかなと思うので、そういった高等学校を作っていくことも一つではないかと思います。

その一つのやり方として、入る時に学科・コース等を分けるということはせず、入った後で分けるというような話が出ました。いいとは思いますが、実は高校の３年間で大丈夫だろうかという不安があります。本学でも理学部と経済学部を改組するということで、レイトスペシャライゼーションといって、１年生の時は一括して取り、後で分けるというような方法をとるわけですが、４年間でもどうなのだろうと思います。

大学の場合は、大学院までを考えてレイトスペシャライゼーションを採用しているので、４年間ではなく６年間とかもう少し長いスパンで考えて、レイトスペシャライゼーションができるのですが、高等学校の場合、３年間のうちの２年目から分けるとなると、果たしてどこまでできるのかという難しさがあるとは思います。

ただ、その辺は工夫の仕様もあると思いますので、できれば高校にいくつかの学科があるといったような形ができるとよいのではないかと思いました。

（アドバイザー）

この会議体での学科・コースの見直しの議論の方向性については、正直窮屈ではないかと思います。というのは、既存の学科・コースをどう微修正するかといった議論になっているような気がします。つまり、今あるいろいろな学科・コースをどう再編するかという「横」の議論になっています。本来、この論点については、もう一つに「縦」の議論があ

ります。茨城県などは県立の中学校がものすごい勢いで増えています。つまり、学校種を縦に貫く議論も実はあるはずで、県立中や小中高大一貫校、大学附属もあり得ることからわかるとおり、現行ルールというのは多様になっているわけです。そういう議論も必要ではないかと思います。

他方で学科・コースというのは、地元進学、地元就職というものと密接に繋がっているので、この会議としては教育論でいいと思いますが、同じトピックで、総合教育会議などで県の産業界にもここでの論点を投げ込んだほうがいいと思います。ここだけの議論に閉じない方がいいと思いました。

また普通科改革について、「現代社会」と「地域課題」は中教審が出した時の二つの例示なのですが、各県でこればかりが盛り上がっているという問題があります。普通科改革は確かに大事かもしれませんが、あまり中教審の議論の例示に囚われないということが大事だと思います。

他方、専門学科から大学への進学が非常に増えていることはとても重要なことで、特に専門学科は設置、維持するコストがとても大きいわけですから、一度潰すと恐らく戻らないので、今ある現有リソースをどれだけ生かすかという観点が大事だと思います。

魅力をどんどん広報するという点では、恐らくおじいちゃん、おばあちゃん世代にとっては、専門学科への進学がすなわち就職を意味してきたと思いますが、実はもうそうではないということをどんどん訴えていくのが大事だと思います。

学科の再編などは、教員目線でいうと新しいことをやらなければいけないということになるので、ぜひ働き方改革を高校レベルで推進していただき、教員自身の学び直しができる時間的余裕を提供できるような、リスキリングができるような職場環境を実現していただきたいと思います。そうすることで新しいコースや学科の中で新しい教育を提供する際に、質の良い教育が提供できるようになるのではないかと思います。

（アドバイザー）

説明にあったように、これまで普職比率が 66%になるように配慮されてきたということでした。しかし、今年度は 63.7%ということで、中学生の志願動向や進路希望、各高校の学科構成、県民のニーズをもとに現在の比率を目安としつつ、柔軟に扱うことも含めて検討するとこの報告書に書かれており、その通りだと思います。

学校の強み＝魅力、そして生徒、保護者、地域の要望ということを先ほど述べましたが、各高校の存在意義や社会的役割等の明確化ということで、中教審の議論でスクール・ミッションの再定義ということが言われてきました。

これについては設置者で再定義をするということと、各学校側で入口から出口までの教育活動の指針ということで、スクール・ポリシーを策定するということになっているわけです。富山県でも、22 年度に策定して公表済みということになっているのですが、各校が作成したスクール・ポリシーと設置者側で検討するミッションを合わせて考えていくということが必要ではないかと思います。

（会長）

ありがとうございました。

それでは、教育長のご挨拶をよろしくお願いします。

５　教育長挨拶

（教育長）

本日は第２回の県立高校教育振興会議を開催させていただきました。

委員の皆様方にはご多忙の中、また、暑い中ご出席をいただきまして、本当にありがとうございました。また、本日は、アドバイザーの青木先生、南部先生にもお忙しい中、遠路お運びをいただきまして、本当にありがとうございました。皆様方から貴重な、多岐にわたるご意見をいただいて大変ありがたく思っております。

何点か振り返らせていただきたいと思いますが、まず、再編の基準といった１点目のことについてです。

例えば４学級など一定規模の学校というのが必要ではないかといったご意見をいただいた一方で、小規模な学校のよさというのもあり、あるいは地理的なことや学科の構成などそれぞれの状況に応じ、必ずしも一律に何クラス以下は認めないということではないだろうといったご意見も頂戴したと思っています。全体的に一律だとか、柔軟性のない基準というのは、慎重に考えた方がいいのではないかといったご意見をいただいたと思っています。

また、学級数という規模・基準だけではなく、今後の学校を考えるには、当然のことながら学科やコースの見直しと一緒に検討すべき、またそれと併せてどのような学校を作っていくのか、どのような理念をもった学校を作るのかといったことも考えなければいけないというご意見がありました。さらに、思い切った教育課程の編成、見直しということも考えてはどうかといったようなご指摘も頂戴したと思っています。

それと普通科系の学校や職業系の学校があり、最近はミックス型の学校も出てきており、それは再編統合を経てできた学校もありますが、そういった学校で非常に活気が出てきたというようなご発言もいただき、ありがたく思っています。多様な学科、多様な学習内容、学んでいる生徒が切磋琢磨する、交流するということで出てくる相乗効果ということもあると思っているので、そういった学校のあり方を今後考えていきたいと思っています。

また、アドバイザーの方から高校教育というのは比較的県で柔軟にできる部分があるというご指摘をいただきました。義務教育に比べるとそういう側面はあるかと思います。例えば科目にしても、学校の方で設定できるといったことがあると思うので、これまでもそういった制度を活用して特色化してきているわけですが、これからさらにそういったことを磨いていくことになるかと思います。

教員の配置について、これも県の方である程度自由にできるというお話もあったのですが、一応理論的にはそうなりますが、一方で国からの財政措置、交付税措置がなされるにあたり、40 人規模の学級ということを想定して「教員何人分を認めます」といったように財政措置がされているという仕組みですので、県で独自にどんどん充実させようとすると国からの財政措置とかけ離れ、県の財政運営上なかなか困難になるといった現実的な問題もあります。そういった大きな枠の中で、どうしていくのか考えていくことになるのだろうと思って、拝聴していました。

コスト面の見える化が必要だというご発言もいただき、ご指摘、その通りと思いました。そういった面も何かお示しをしていければいいと思っています。

２点目の学科・コースについて、学科名が変わっていないということで、若い人たちに何が勉強できるのかが分かり、ワクワク感をもって選んでもらえるような工夫が必要ではないかというご指摘も複数いただきました。思い切って学科のあり方もデザインする。名前もそうですし、あり方もデザインする必要があるのではないかと。そして誇りをもって学校を選んで学んでもらえるといったことが大事だろうというご意見はその通りだと思います。

農業高校での取組みもご紹介いただき、ありがたく思います。入学者数が伸びないという実態がありますが、ご指摘いただいたように大変よい教育環境で、よい活動をしている学校です。中学校へのＰＲなどにも努めてはいますが、なかなか広くできるところまでは至っておらず、その学校の魅力発信ということについてはさらなる努力が必要だと思って拝聴していました。

それと、括り募集というか大枠で入ってその後選ぶレイトスペシャライゼーションのお話もありました。確かにすごく魅力的な取組みだと思っています。その一方で、例えば職業科の場合、３年間あるからこれだけの勉強ができているとか、資格取得にも繋がっているといった実態もあると思います。そうしたそれぞれの学科の状況とレイトスペシャライゼーションのメリットというものをよく調べ、うまくいくかどうかを確認して、進めていくことになると思っています。

それぞれの学校のあり方、スクール・ポリシーの磨き上げということもさらに必要だということを思って拝聴をしていました。

今回第２回ですが、この後この会議は年度内に３回程度開催させていただきたいと思っており、最終的には、基本的な方針というものを取りまとめたいと考えています。

次回の会議については、本日ご協議いただいたご意見も踏まえ、事務局として考え方を整理したものを複数の案という形になるか、また考えてみたいと思いますが、整理をしてご提示できればと思っています。

それと併せて、その他の新しい学校のあり方、中高一貫といったような縦の議論もあるというご指摘もいただきましたが、そうした話も次回以降に行いたいと思います。

今後 10 年余りで、３割くらいのお子さんが減ってしまうという非常に難しい局面ですが、同時に未来の予測が困難な時代ということで、その中で自分の生き方を考えて選び取っていける子どもを育てるという、教育には非常に大きな課題が課せられていると思います。何とか富山県の教育をさらによりよいものにしていくために、この検討会議で議論を深めていけたらありがたいと思っていますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

（会長）

ありがとうございました。

県の教育委員会におかれては、これまでの基準に加え、本日各委員から頂戴した多様な観点からの検討を踏まえていただければと思います。やはり最後は高校生ファースト、そして三方よしをより高いレベルで実現する富山県の力を発揮することが必要なのではない

かと思っていますので、よろしくお願いいたします。

議事が終了したので、委員長が終了を宣し、進行を事務局へ戻した。

６　閉会

12 時 10 分、司会が閉会を宣した。